一般財団法人日本不動産研究所49

地域資源を生かす

～まちづくりからインバウンドまで

奥出雲町　神話の里

たたら由来の自然と産業との共生

農業生産を継承し地域活性化

季節は春。蕎麦の白い花には会えないが、斐伊川堤防の桜は開花しているかもしれない。せっかくの休日。ドライブを楽しむために、出雲そばの産地、奥出雲へやってきた。皮ごと挽いたそば粉で作るため、何より黒くて香りが強い。のど越しというより、歯ごたえを楽しむ食べ方だ。

奥出雲は、古事記の「ヤマタノオロチ伝説」の舞台で、神話の里だけに、神社が多いことに納得し車を走らせ、松本清張の『砂の器』の舞台となったJR木次線、亀嵩駅舎で割り子を食し、「たたら」関連の施設を巡ることにする。

亀嵩駅舎で出雲そばを味わう

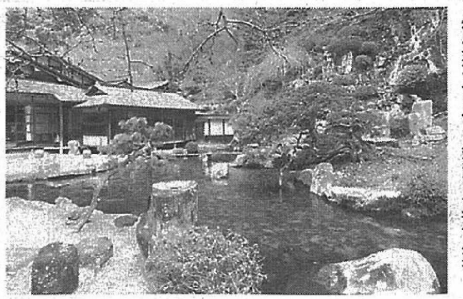
古代から続いた製鉄

「たたら」を知らない人間には、八岐大蛇（ヤマタノオロチ）から、連想ゲームのように何かヤマタノオロチの「祟り」のことかと思われそうだが、そうではない。「たたら」とは、木炭を燃料とする鋳鉄溶融用の炉に送風するための足踏み式ふいごのことだ。ふいごとは、炉に風を送る道具のことで、奥出雲では、たたら製鉄を古代から近世まで行っていた。最盛期には、奥出雲地方で、全国の6割の鉄の生産を占めていた。チタン、燐、硫黄といった不純物が少ない良質な真砂砂鉄を採取することができることに加え、豊富な山林資源から、燃料となる木炭の調達も容易であるといった条件に恵まれていたからだ。しかし和鉄製法は、1901年（明治34年）の八幡製鉄の建設と共に、生産性がはるかに勝る洋式製鉄に取って代わられた。

鉄の礎を学べる奥出雲たたらと刀剣館

現在では、「奥出雲たたらと刀剣館」「鉄師の頭取屋敷」「たたら角炉伝承館」といった観光施設を訪問することで、日本の根幹産業である鉄の礎を学べ、神話の時代から培った自然と産業との共生は、目の前の棚田に見ることができる。

たたら製鉄は、山を切り崩すことはもとより、大量の土砂を河川に流すことで砂鉄を採取する「鉄穴流し（かんながし）」という手法が使われた。そのために生ずる洪水の対策のため、「鉄穴流し」跡地を棚田に造成し、土砂を新田開発に利用した。計画的であるため、圃場整備したような棚田が広がる。先人たちの豊かな応用力に敬服する。

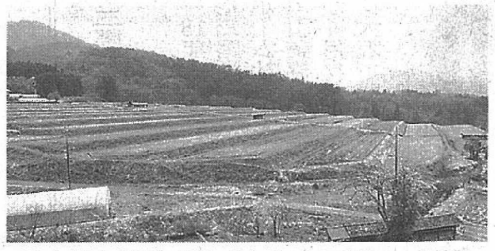

観光名所の一つ鉄師の頭取屋敷

日本農業遺産に

日本海側の松江市から車で約1時間、出雲大社から70分、瀬戸内海側の広島市から2時間半。どちら側からも、気軽にたどり着けない位置にある、のどかな山里。スサノオノミコトが降りてきた船通山を望み、棚田を眺め、所々に点在する小さな施設にお邪魔することで、神話から近世までの情景を想像できる町。

現在では、水質が良いため池や水路により「仁多米」ブランドを育て、ソバ、和牛、更に脇を固める林業も含め、「たたら製鉄に由来する奥出雲の資源循環型農業」が「日本農業遺産」に認定された。これから先も、奥出雲町は農産品のブランド力強化により、農業生産の継承を図り、地域活性化を目指している。

地域活性化の中には、起業・創業、定住の支援政策のほか、観光振興も含められているが、インバウンドはここまでは押し寄せてはいない。いずれ神秘な魅力が認識され、海外からも観光客が押し寄せてくるかもしれない。一つどうであろうか、そろそろ「出雲」の奥に行ってみないか？（松江支所、不動産鑑定士・宇野栄）


鉄穴流し跡地を造成した大原新田の棚田